

アクティブラーニングにおける効果と積極性を上昇させるには

3年2組36番 矢木果奈

Keyword:「授業」「学校教育」「アクティブラーニング(Active Learning)」「会話」「生徒」

1. はじめに

私は人と会話することに苦手意識を持っている。初対面の人と話す時は毎回緊張するうえ、友達を作ることも苦手だ。しかし、国際高校に入学してから会話に対する意識が少し変化した。その要因は授業だ。一生徒の意見だが、国際高校の授業はグループワークやディベートなどの二人以上の複数人で行う授業が多い。私はこの授業形態を通して会話の必要性や楽しさを感じ、会話に対して否定的ではなくなった。その経験から私は教育現場内で行われる学習方法に関する探究を始めた。

2. 序論

本論文では国際高校の授業に焦点を当て、自校の生徒が授業内で積極的かつ授業内容を効果的に活用する方法を考察する。まず、一般的な定義をもとに、「アクティブ・ラーニングとは何か」という自分なりの定義を設定し、生徒達の授業内での会話や授業や会話に対する意識が関係していると仮定した。

文部科学省によると、「アクティブ・ラーニングとは、学生にある物事を行わせ、行っている物事について考えさせること」(アクティブ・ラーニングに関する議論-文部科学省より)と定義されている。また、「一方で、アクティブ・ラーニング型授業も中盤を過ぎ、ディスカッション活動にも慣れてきた頃に、テーマから脱線するような発言をしたり、自身の意見表明を抑制したりすることは、学習への動機づけに負の影響を与えることも明らかになった。」(田村,2017,p20)とされている。

先行研究を踏まえ、アクティブラーニングの効果と積極性を向上させるためには生徒及び教師両方の意見を擦り合わせることが必要と考え、教師・生徒それぞれインタビューとアンケートを実施した。

1:国際高校に勤務している教師陣約13名を対象としたインタビュー

〈インタビュー内容〉

- ①アクティブラーニングに対してどう思うか
- ②教師陣の高校在学時の授業形態について
- ③教師陣が行なっている授業で工夫や意識している点
- ④国際高校の生徒がアクティブラーニングを行うにあたり効果や積極性を高めるためには

2:国際高校の生徒を対象とした授業に関するアンケート

注)アンケートは2025年度の高校三年生・高校一年生を対象としたものである。

〈アンケート内容〉

- ①あなたが通っていた小・中学校と比べて国際はグループ・ペアワーク等が多いと思しますか。
- ②国際のオープンキャンパスで体験授業を受けたことはありますか。
(「はい」と答えた人のみ体験時の印象や感想を記入)

③グループワークに対して苦手意識はありますか？

（「はい」と答えた人のみ理由を記入）

④一番好きな授業は何か

3. 本論

右図は、2025年度の高校一年生・高校三年生へのアンケート結果と、2025年1月～3月時に本校に在籍していた校教師13名を対象としたインタビューの結果をまとめたものである。

まず、生徒対象のアンケート結果のデータ①・②・③・④をそれぞれ比較していく。データ①では、高校三年生で「はい」と答えた人が95.6%、「いいえ」と答えた人が4.4%、高校一年生で「はい」と答えた人が90.6%、「いいえ」と答えた人が9.6%と減少傾向が見られた。データ②では、高校三年生で「受けた事がある人」は63.3%、「受けた事がない人」は36.7%、高校一年生では「受けた事がある人」58.9%、「受けた事がない人」は41.1%と減少傾向が見られた。データ③では、高校三年生は「苦手意識がない」と回答した人が71.1%、「ある」と回答した人が28.9%、高校一年生は「ない」と回答した人が75.3%、「ある」と回答した人が24.7%と苦手意識を持つ人が減少傾向にあった。

次に、教師を対象にしたインタビューについてであるが、①では、アクティブ・ラーニングに対する意見では比較的肯定的な意見が多く見られた。しかし、インタビューによってはそれぞれの教科によって向き不向きなどが明らかとなった。②では、教師陣の高校在学時の授業形態は国際高校との授業体系とは異なり、教師と生徒の会話がなく板書を写し続ける講義型の授業が多いとの意見が多くかった。③では、各教科ごとに意識や工夫している点が異なっていた。それに加え、生徒同士での対話以外にも様々なアプローチ方法で授業を工夫していた。以下に、インタビューで得た授業方法の例を示す。

例)①国語科の教師の工夫点

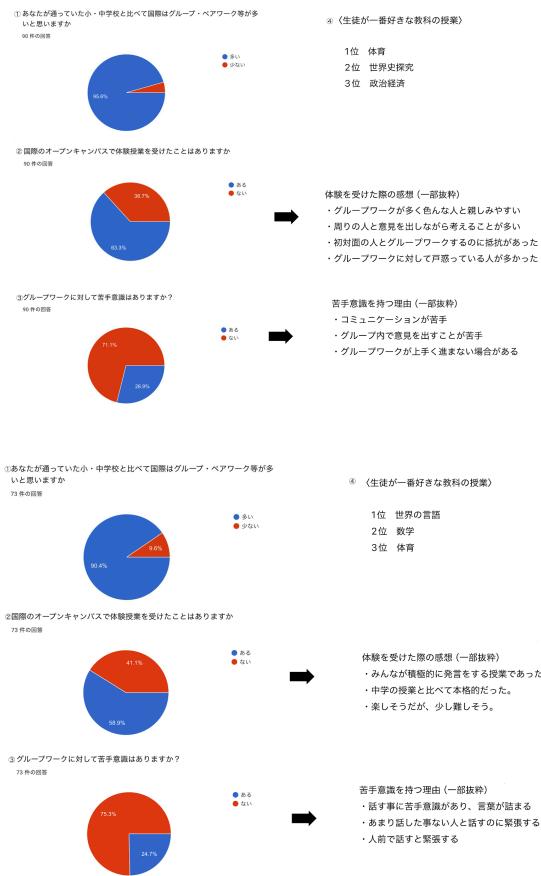
- ・まず、グループワークをすぐに行うのではなく生徒一人一人に自分の意見を一つ書くようにする。
- ・グループワークを行う中で一人一つは必ず発言を行うことができる。



- ・グループの中の発言する人の固定化を防ぐことができる

②社会科の工夫点

- ・授業中に地図を活用し、国の位置関係の確認。
- ・スライドの活用(文字数や絵、資料などを活用し生徒に印象を与える)。
- ・複雑な内容などは知っている内容と結びつけ、イメージをわきやすくする。
- ・教師側からの発問を行い、生徒に考えさせる事で頭を活性化させる



④では、人権の授業などのクラス全体で考える授業を例にあげ、グループワークを行う上でより効果や積極性を上げるために教師自身がグループを周り、会話に参加しつつグループ内の会話を活性化を促したり、グループ内にそれぞれの役割を与え、会話を行える環境を作り出しているなどの意見が出た。

上記の結果より、授業への積極的な参加やその効果を上昇させるためには生徒の授業への理解度を高める事に関係があるのではないかと考察する。その理由としては2つ挙げられる。1つ目は、オープンキャンパスへの参加が3年生から1年生にかけて減少しているという結果から推測できる。オープンキャンパスは学校自体を身近に知ることができる唯一無二の物であり、自校では授業体験を行えるため、国際高校の授業を直に体験できる。二つ目は、コミュニケーションを苦手とする人の減少だ。苦手とする人が減少しつつも現状はまだ存在している。完全にとは言わないが、少しでも軽減するには授業の形式を予め知っておけば本人たちにとっても少し気持ちが和らぐのではないのだろうか。

4. 結論

今回は自校である国際高校の授業に対する生徒たちの積極的な参加と授業内で行われるグループワークの効果の上昇を主題に設定して探究を行った。探究を行う中で、生徒へのアンケートと教師へのインタビューを行った。それらの結果を踏まえて、その問を解決するには生徒たちが学校の授業の内容や様子を事前に知ることで授業に対する興味・関心を得ることができると考える。またコミュニケーションを苦手とする人に対しても、事前に様子などを知ることで本人たちへの心身への負担や発言のしやすさに少しでも繋がる可能性があると考える。

今回の探究では、目的に関する新たな課題や誰に焦点に当てて行動していくのかを明確にできた。私は、国際高校の授業風景などをより明確に知ってもらうために入学時やオープンキャンパスなどでQRコードを活用し、より多くの人に知ってもらおうと計画していた。そのために、計画などをある程度構想していたものの、調査と分析に時間をかけてしまったことから、実際に行動に移す事ができなかった。

5. おわりに

私は、グループワークやディスカッションなどの集団での授業活動に対して否定的な物として認識していたが、アンケートの意見やインタビューなど実際に生徒の「気持ちや教師陣の捉え方を聴いた事で自分が今後どのように授業と接して行けば良いのかや会話に対する固定概念を変化させられた。それにより、三年生のグループワーク等を否定的な気持ちで行うのではなく、自身から能動的・積極的に参加することで知識の幅や考え方の視点が広がった。

否定的な印象から脱する事は出来たが、今後私は、今よりも更に大きなコミュニティで生活していかなければならない。確かに今よりも人数が多くなることで、自分から積極的に動く事は難しい。しかしそれを理由に会話から逃げるのではなく、自分から会話と向き合い、自身の知識の幅や多角的な視点を今よりもより多く吸収していくことが必要であろう。

6. 参考文献・出典

・文部科学省 発表資料:『アクティブ・ラーニングに関する議会論』.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1361110_2_5.pdf 2015年9月24日

・木村治生(2016).「小学校・中学校・高校における「アクティブ・ラーニング」の効果と課題」『「第五回学習基本審査」報告書』, p44~p51,
https://benesse.jp/berd/up_images/research/06_chp0_4.pdf

・松下佳代(2015).『ディープ・アクティブラーニングー大学授業を深化させるために』勁草書房